



今月の御聖訓



月々日々につより給へ。すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし。我等凡夫のつたなきは経論に有る事と遠き事はをそるゝ心なし。

【聖人御難事 一一九〇頁】

目次

今月の御聖訓	
巻頭言	菅野憲道 1
お講講話 「われはこれ塔建つるもの」	菅野憲道 2
天地つかの間〔その④〕	成田詳道 8
法の香炉 「鶴丸・亀甲・松竹梅〈追加〉」	9
ちょっと寄り道④〈エクセル礼讃〉	森田観道 12
日蓮正宗の血脈相承について	荒木清勇 13
興風談所出版書籍のご案内	16
懺悔か弁解か、はたまた毫碌か、「御法主上人」の講評	17
読書案内『山の放課後』	松田銘道 20
忠行だよ	21
十一月の行事 霜月詠草	

ノースサイド

菅野 憲道

寒くなると、楽しみのひとつはラグビーシーズンが始まることである。競技場まで観戦にでかけることはないが、テレビの前でも、荒ぶる若者の肉弾あいうつ戦いに思わず大声をあげてしまうことがある。もうラグビーなど、私にとってにははるか昔の思い出でしかないが、無意識のうちに身体を動かすことさえある。

ラグビーは良い。何と言っても試合のグラウンドに飛び出していくときの、あの緊張感というか悲壮感というか、まるで玉砕覚悟のような決死の思いは、いま考えても貴重な体験をしたものである。ひとたびラインを跨げば、もう己れしか頼るものはない。敵味方ぎりぎりのところで格闘するのである。

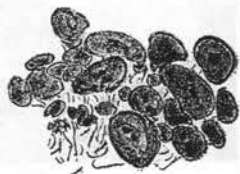
個人プレーはほとんどない。トライした者が称賛されることもない。みんなでボールをつないでトライするのだから、たまに最後にボールを受けたものがトライするだけだと割り切っている。しかも楯円のボールの転がりようで攻守は一変してしまふ、そういう予測しがたい運不運のようなものもあって、時々刻々変わる状況をつねに予測しながら全力疾走である。ゲームの流れやコート全体の見渡す大局観も必要だ。

ジャッジには絶対服従である。ラグビーほど審判が権威をもつ競技もめずらしいのではないか。あきらかなミスジャッジでも、どんなに興奮していても、審判には誰も異をとねない。とにかくフェアプレーを一番大切にする。

しかし、もっともすばらしいのはノースサイド（終了）のホイッスルが鳴ると、さっきまであんなに興奮し、怒鳴りあい、ぶつかりあってきた敵味方が、互いの健闘を心からたたえて握手し、肩をたたきあうことである。そこには互いに死力を尽くしたものにしか分らない共感がある。ゲームが終ればラガー同士である。

宗門人や学会員は、彼等のフェアプレーの精神とノースサイド後のさわやかな姿に学ぶべきだろう。喧嘩するのも結構だが、同じ人間として共感を失ってしまえば宗教どころではない。

人生もノースサイドのホイッスルがなった時、どれだけの人が彼等のようにさわやかな心で、その健闘をたたえられるだろうか。



お講講話(要旨)

拝読御書 「阿仏房御書」(全集一三〇四頁)

われはこれ塔建つるもの

菅野憲道

《宝塔の意味》

この御書は、阿仏房夫妻が大聖人のもとにご供養を献じられて、そのさい法華経宝塔品における宝塔涌现の意義をお尋ねされたことに対して、宝塔は決して他にあるものではなく、妙法蓮華経を信受する者のその身そのまま宝塔なることを明かされた御書です。塔については、仏教以外の宗教であっても、尖塔などを建てて神仏の徳を象徴するということがあるようです。仏教でも、釈尊入滅直後から、塔を建てて供養する仏塔信仰が広く行われていました。

大乘仏教でも、その流れを汲んで中国や日本等のお寺などで、塔をたくさん見かけます。七堂伽藍といって、本堂・講堂・塔・山門・僧坊などの建物が揃ったものが寺院といわれますが、その寺院の中心は元もとほは宝塔であったのです。仏塔を建ててその周りに修行者の僧坊が集まった形が寺院の原型なのです。

日本の寺院でも古い寺院ほど塔が中央にあります。例えば四天王寺や法隆寺は日本で最も古い時代のお寺に属しますから、門を入っていきますと、右の中央に五重の塔があつて左手に金堂があ

り、ちょうど中心線の両側にそれぞれを振り分けてあります。これはやや時代が下がっていることから、中心から少しそれているのです。

その後、だんだん時代が下ると、塔は中



大聖人のもとへ通われる阿仏房・千日尼夫妻

心からはずれて、中央に本堂が建つ形式になってきます。それは宝塔の全体が仏身を象徴するという意義が忘れられ、仏像信仰の方に傾斜していったからです。しかし、仏教本来の姿が仏像ではなく、宝塔信仰だったことは重要な意味をもっているといえるでしょう。

ご存じのように、法華経見宝塔品では、靈鷲山の大地から七宝の大塔が涌出してきたことが説かれております。その宝塔は高さ五百由旬もあり、金銀等の七宝やいまだ見たこともない宝物で荘厳されている広大な塔であり、しかも空中はるかにそびえ立っていたことが説かれております。

ところでこの宝塔とはなんでしょう。これは仏の本当の姿であり、悟そのものでもある妙法蓮華経を、衆生にしらしめるための象徴なのです。

その宝塔は、三世十方の諸仏あらゆる菩薩が集まってきて取り囲みます。またそればかりでなく弟子の声聞・縁覚の二乗も、六道の衆生も、あらゆる世界の衆生が雲集してきて、その宝塔が横に一切の空間を収める普遍的な場であることを象徴します。さらに宝塔には多宝如来がましましていて、縦に過去・現在・未来にわたる永遠の姿を象徴するわけです。

この宝塔の顕わす姿は、十界互具・百界千如・一念三千の法門を宝塔の姿をもって示されたといえます。

仏の悟られたすべての物事の真実の姿は、妙法蓮華経であり、時間的にも空間的にも、無限にして無数の因果の繋がりをもって調和し、統一されたものということを象徴しているのです。

要するに、一念三千の法門とか妙法蓮華経という「法」を宝塔

として表されたのです。これは、そのようにしか表しようがないから宝塔をもって表わされたのであって、仏像や教理では顕せないものだったのでありましょう。

仏法を信解するということは、自分の知識で大きいとか小さいと分別したり、頭で綺麗だとか立派だと判断するのではなくて、天を覆うがとき仏塔の前にたたずんで、文字通り大塔を仰ぐように、すべてをなげうってあるがままに仏法を敬仰し、信受すること以外に道がなかったものともいえましょう。

《他と切り離すことができない我われの存在》

もともと、我われ衆生は、自分というものに迷って、自分からなくなっているといえます。

たいていの人は、普段「自分は何者であるか」などと考えることはありません。考えたことは無いけれども、それが分かったようなくもりでいて、ほとんどの人は、自分を一番大事にし、自分を守り、自分のために何かを行おうしているのです。

自分の今の感情「怒り」とか「喜び」、それから今の欲望「あれが欲しい」「これがしたい」など、自分の実体もわからぬままに、とりあえず肉体的な欲望と感情的な欲求を満たすことのみ日々いそしんでいるわけです。

私は時々「自分というのは何なんだろうか」と思います。この体や心を一体誰が作ったんだろうかと、時々不思議に思うことがあります。我われの体には六十兆ぐらいの細胞があるといわれていますが、指一つとってもずいぶん精巧にできています。この中の数百億の細胞が見事に調和され、整然と動く。どんな科学技術

を結集しても、人工的にはこんな見事なものではできません。この指一本でも自分で作った記憶はないのですが、いつの間にか自分に与えられている。

また自分の意識や思考もそうです。自分がそれを作ろうと思っ
て作ったわけでもなければ、手に入れようと思って手に入れたものでもありません。気がついたらいつの間にか与えられていた。けれども、またいつか無くなってしまうのでしょうか。

そうやって考えてみると、自分というのは一体何なんだろうかとつくづく不思議に思いますね。みんなは自明の如く、自分は誰々であるとか、あの人は何々である等といいますが、その仮定以前をたずねれば、本当は非常にいいかげんなものではないでしょうか。

仏法では、個々の具体像というのは、仮和合の姿であって、本当はそういうものを全部ひっくるめて法界と表現するのですが、ここでは、

「今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり。」（全集一三〇四頁）

といわれています。要するに、この世界、この宇宙すべてが因縁果報という妙法の中にあり、我われ人間とて例外ではありません。

これを華嚴経等ではインドラの珠網という譬をとっています。よくお寺などに行くといふ前の莊嚴具に宝珠の網が懸けられている所がります。それは数珠のように宝珠を繋いで網を作り、天井からぶら下げたりするものです。この宝珠の一つ一つの表面に、全体の宝珠の網が互いに写って輝いています。一個一個別々の珠なんです、しかも相互に珠網のすべてが写っている。この網をどれか一つ引く張ると全体が動いてきらきら輝く。けして一つだけ

動いておわりということはない。要するに生起するすべての現象は互いに影響しあって無限の因縁を有するのでありまして、これを一行即一切行などいいます。

法華経の一念三千の法門はこれをさらに押し進め、因果の網が横に無限であるばかりでなく、縦にも永遠の時間軸をもって我われが存することを明かしているのがあります。異質と考えられてきたあらゆる物事は一切が因果の網にとらえられるものであり、その因果関係というものは平面的なモデルではなく、立体的かつ時間的に無限性をもち、時空を超越しつつ、しかも一切に内包されるという、凡智をもってしては計りしれない法を示されているのであります。

我われは、何となく自分が周りと切り離されてポツンと存在していると考えていますが、実際には時間という軸をとっても、空間という軸をとってもあらゆるものと無限に繋がっていて、それだけが切り離されていることはないのです。例えば自分の生命は自分のものだから何をしても他人には関係ないと思っっているけれども、そんなことはない。精神的にも物質的にも周囲に甚大な影響があります。

このように仏教では自己を小さな自我意識に納めてしまうのではなく、法界の全体を自己と捉えていくのです。たとえば一本の木でいえば、地上に現れた花果や枝葉は、地中にネットのように張り巡らせた根茎があるから存在している。その根茎の先は大地と一体になっている。それらは別々のように見えても一体のものでしょう。人間とて同じことで、目には見えませんが、根っこにあたるものが、四恩として表現された父母、師匠・衆生・国・自

然界、三宝なのです。

またこのように複雑かつ無数の不可思議な因果の上に我われの現実があるわけですから、妙法蓮華経を信ずるところ、何があるうとも、この不思議な生を、この希有な世界を有難いこととして肯定し、感謝できる信仰が芽生えると思うのです。

《我が身がそのまま妙法蓮華経の当体であり宝塔》

最近はっきりと大地に根を張ったような信仰が忘れられていすから、ほとんどの人が、金持ちになりたいとか、楽をしたい、他人より出世したいというような名聞名利に振り回されております。こういう軽薄な人生観ですから、その逆に年老いたり、病気になる、自分の人生を否定して、絶望感に陥ったり、あきらめてしまふ。貧しくても、体が不自由でも、また年老いても、それはせんぶ自分が肯定すべきかけがえのない人生の一部であると受け止めていってこそ、本当の人生が開けていくものと思います。



大石寺の五重の塔

ちょうど自然界でも春夏秋冬があり、また晴雨風雪があるように、人生だって四季もあれば、嵐の日や風雪の日もある。夏だけの人生とか、昼間だけの人生であつたら、まったくおかしなことで、自分というものを全然わかっていない姿であると思います。

「観心本尊抄」(全集二五四頁)において、

「一念三千を識らざる者には仏大慈悲を起し、五字の内に此の珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめたまふ。」

とありますように、この愚かな衆生に対し、事一念三千の法界の姿を、妙法蓮華経の宝塔の姿で表されたのでありまして、それを大聖人は一幅の曼荼羅に図顕されたのであります。

この御本尊に向つて南無妙法蓮華経と信じて唱えるということは、自分の小さな捕らわれた心や小賢しい智慧を捨てて、この御本尊の鏡のまゝに立つてみれば、本来の自分がその身そのまま事一念三千・妙法蓮華経の当体であり、三世常住の法界そのものであるということを通じて、証得していくことだと思ひます。それを、

「然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房」(全集一三〇四頁)

といわれていますが、宝塔というのはイコール妙法蓮華経の仏身であり、イコール御本尊ということです。妙法蓮華経を信じ、妙法蓮華経を人生に行じていることこそが真の宝塔＝仏身であり、そこに一生成仏の姿があると教えられているのです。

仏教における仏塔信仰ということも、塔を建てて供養するということも、妙法蓮華経の宝塔が仏を象徴するものとして敬い供養するのであって、そうすることによって、それは他者を供養しているのではなく、我が身を供養しているという意義にもつながる。

てくるのであります。

すなわち法華經法師品（開結三九〇頁）には、

「薬王、在々処々に、若しは説き、若しは読み、若しは誦し、若しは書き、若しは経巻所住の処には、皆応に七宝の塔を起て、極めて高広嚴飾ならしむべし、復舍利を安んずることを須いじ。所以は何ん、この中に已に如来の全身有す」

とあります。これは法華經を如説修行する場合は、どこであろうと塔を起てて供養しなさいということです。しかも「舍利を安んずることを須いじ」というのですから、釈尊の舍利（遺骨のこと）であるが、ここではそこから転じて仏像という意味にも通ずる）を安置する必要はない、それは宝塔の中にすでに仏の法身の全身が在しているからだということです。

要するに、肉体は滅びても、その教え、精神、魂そのものが仏ということ、妙法蓮華經そのものが仏身ということですから、宝塔には妙法蓮華經を安置し、供養せよといわれているのです。

さらには神力品にも、

「所在の国土に、乃至、若しは経巻所住の処、若しは園中に於いても、若しは林中に於いても、若しは樹下に於いても、若しは僧坊に於いても、若しは白衣の舎にても、若しは殿堂に在つても、若しは山谷曠野にても、是の中に、皆応に塔を起てて供養すべし。所以は何ん。当に知るべし。是の処は即ち是れ道場なり。」（開結五八〇頁）

とあって、これは特定の限られた場所のみが仏道修行の場ということではなく、妙法蓮華經を信じ、発心修行したところは、そこがどこであっても修行の道場なのであるから、そこに塔を起てて供養し

なさい、妙法蓮華經の宝塔を供養しなさいと規定されているのです。

これは、けして立派に法華經を説いたとか、何百万の人々を折伏したというようなことではない、力が無くても、知恵が無くても、純粹な志を起こして法華經を修行するところが道場だということです。

また、この神力品に、「この道場において、すべての仏が誕生し、諸仏が悟を開かれて初めて説法し、あらゆる仏が涅槃をとげられたのである」とありますから、三世諸仏の本地は、妙法蓮華經の宝塔にあるということです。

そして、この宝塔を起てるといふことは、「一心欲見仏不借身命」という受持行において、自己が事一念三千・妙法蓮華經の当体であることを実証していくということなのです。

もっとわかりやすくいうと、妙法蓮華經に生きよう、妙法蓮華經を自からも行じ、他にも流布していこうと志を起こすところに、宝塔を起てるとの本質的な意味があります。

今の世の中は何かつねに他なる世界に成果を求め、外に財を蓄えていこうということばかり考えておりますが、我が身を宝塔化していくことこそ、真に忘れてはならない、人生の意義であります。

自己はその人の信仰・思想によって瓦礫ともなれば宝塔ともなる。今我われはこの値いがたき仏法によって、我が身を宝塔化し、仏身化する道を示されたのです。

その宝塔は「聞・信・戒・定・進・捨・慙」という七宝をもって飾られた姿である。すなわち妙法蓮華經の仏身を感じた己身は、そのまま人間的にも大きな徳を具えた姿である事を意味します。「教主釈尊の出世の本懐は人の振る舞ひにて候けるぞ」（全集一一七四頁）というご金言に通ずるものです。

この阿仏房は齡九十に近づいてなお背筋のしゃんとした姿勢で信仰を貫かれています。この一人の老人の姿に、大聖人は真の法華経の宝塔の姿を見て取られたのです。そして、法華経に説かれた宝塔はあなたの姿なのですと、その志ざしを称賛されたのであります。このことは、後代のあらゆる人へのはげましでもありません。

宝塔が起っている姿を想像して下さい。我われも卑屈になり、斜めに構えたりしないで、この宝塔のような心映えを持ちたいものです。煩惱の大地をうち割って、仏性という尊い宝塔を己心に涌现させたいものです。

《われはこれ塔建つるもの》

このことについて、宮沢賢治の詩を紹介いたします。

宮沢賢治は、昭和八年の九月二十七日に三十八歳で亡くなりましたが、死ぬひと月前に作ったといわれている詩です。

「手は熱く足はなゆれど われはこれ塔建つるもの

滑り来し時間の軸の をちこちに美ゆくも成りて

燎々と暗をてらせる その塔すがたかしこし

むさぼりて厭かぬ渠ゆゑ いざここに一基をなさん

正しくて愛しきひとゆゑ いざさらに一を加へん」

この詩を作った頃は、宮沢賢治はもう病床にあつて、始終高熱が出て、間もなく死を迎えようという時期でした。しかし、そういう状況になったとしてもお題目を唱えて、一人ひとりの人の本当の幸福を願って精進していきたいという切実な心境を詠った詩です。これはまったく如来神力品の道場観、あるいは起塔供養そ



賢治が所持していた御書

のままだったのではないかと思えます。

人間、最後には施設や病院の片隅でひっそり死を迎えたり、あるいは田舎の陋屋とか都会の真中の豪邸が終

いの住処かもしれないませんが、いずれにせよ必ず終わりがあります。それまで、いかに世間的な幸運に恵まれても、他にのみ財を蓄えて、己れ一身に宝を積むことを忘れてはまったく愚かなことです。世間的財物はけして来世にはもっていくことができません。

正しい信仰を確立せず、己れ自身に迷っているのは、臨終の際に奈落の底に突き落とされるばかりです。また我われにしても良い時だけ信心ありげな顔をして強いことをいっていても仕方がないのであって、逆境の時でも、苦難が続く時でも法華経の御本尊を信じて、始終全うしなくては意味がありません。一生涯いくつもいくつも宝塔を立てて供養するようなつもりで精進していかなければならないのであります。

そしてこのような信力・行力と仏力・法力の合致したところに我が身の宝塔が屹立するのであります。このことを御本尊が、また日蓮大聖人のご一代が語っているのであります。

南無妙法蓮華經

(了)

大阪市都島区にある、創価学会会館の看板から「池田」の二文字が、消えているとの話を聞いた。

まさか？。第一あの人一倍、名誉欲の旺盛な、池田先生の名前が、会館の看板からはずされるなんて、そんな悪洒落なにかの間違いに、違いない。

第二に、学会では地方に会館を建てる際に、学会員から集まる金額が多ければ

天地つかの間

〔その四十〕

成田 詳道

「創価学会〇〇池田／平和／文化会館」の名称となるが、少なければ、池田の名前は使用できない、と噂に聞いている。

当然のことながら、幹部・責任者はシヤカリキで集金し、なんとしても「池田××会館」の尊称を賜り、先生のお褒めにあずかりたい。

また頑張つて、せっかく荣誉ある恩賜の称号を獲得したのに、ある日突然に看

板から消えてしまったのでは、地域学会員が黙つては居るまい。

ところが、大通りに面したその会館には、確かに数年前まであった、彼の名前が無くなつていた。妙な話だが、ここは一つ継命新聞社に、問い合わせねばと、大橋一法師に連絡を入れた。すると、



各地で「池田」という字が消されている会館

「平成八年の宗教法人法の施行から、そういう動きが、全国的に行なわれている。これは宗教法人法に対する一つの対策である。なぜなら名誉会長という、権限がない立場で「池田」という個人名を、法人組織の建物に冠し続けることで招く、創価学会の私物化」と

の批判を、回避するのが狙いだらう」との事。

地元の声も、池田会館では本人が税金を払わされる、ので外した。要するに税金対策、との噂がもつばらである。

なんとも名誉会長先生様らしい、いかにも狡い、チヨロマカシだろう。だが、それでは、いかな池田センセイでも、ここは一番辛抱せねばなるまい。

それにつけても、不思議なのは、学会員の反応である。オラが村に建てる会館に、是非とも「池田」の称号が欲しくて粉骨碎身し、かき集めた金だろうに、ほんの数時間で、突然はずされて、何とも感じないのだろうか？。

全国的な動きだと言うのに、内部には動揺も異変も、一切ないそうだ。イヤあゝ学会員はなんと、善意の集団なんだろうと、錯覚を起こしそうである。

ハテ、そうだろうか？。やり切れないのは、宗教を理由に無自覚・無批判・無関心で、無事故ならぬ、無自己とされてしまう人々の人間性である。善意とばかり、喜んで居られまいに。

(源立寺執事)

【法の香り】

日宣上人説法稿本

鶴丸・亀甲・松竹梅の事(追加)

(目師会と七五三)

以前、五月号・六月号の二回にわたつ

て、日宣上人のご説法より三祖の御紋に

ついて書かれたものを紹介し、それをも

つてすべてを紹介し終ったものと思つて

おりましたが、改めて日宣上人の説法本

を披いてみたところ、追加分が少々残つ

ていたことがわかりました。

そこで新たに残っていた分について、

編集室で入力しましたので、ご紹介して

皆さんのご参考に供したいと思ひます。

今月は日目上人の御正当会の月でもあ

りますので、ちょうどよいかと思ひ掲載

いたします。

(編集室)

〔目師御紋の事追加(二十三日分)〕

目師の御紋の事、昨日荒々申入るる如

く、日目上人の御紋は松と竹だ。此の松

と竹は天地の性を受けて、天地の間に生

るる処の竹木の頭だ。

在家の身に取つて云はば、夫婦は即ち

天地だ。其の天地の間に生るる処の子供

は即ち天地の性を受けて、生るる処の草

木の如くだ。

仏法に取つて云はば、日蓮大聖人は一

切の衆生の父母だ。且く天地に分る時に、

興師を地に配し、母に形取る。其の父母

天地の性を受けて、嫡子分と成らせ玉う

処の日目上人なる故に、草木の頭たる松

と竹が御紋に付いて居る。日目上人嫡子

分と云う事、日興上人より日目上人まで

下し置かるる処の御讓状に云く、

「別紙云々(御筆に、引用文無し)。

『日興跡条々事』か。』(編集室注)」

是れ日目上人嫡子分と云う証拠でござ

る。

さて又祖師興師の御紋は、最初云う如

く、男女の頭に頂いて居ると云う不思議

があるが、夫れに付いては目師の御紋も、

又在家の身に取つて、何ぞ不思議の道理

があるかと云う時に、在家の身に取つて

云う時は、夫婦の間に生るる処の嫡子、

惣じては子供に付けて、天然自然の道理

がある。

夫れはどう云う子細ぞなれば、余国は

扱て置き、先比江戸の内を云うて見る様

なれば、江戸中の所々に、皆氏神と云う

が分れてある。山王の氏子、明神の氏子、芝の方なれば神明の氏子、或は八幡の氏子、山の手なれば白山、或は氷川の明神、此の近所なれば牛の御前の氏子と、皆夫々に氏神氏子と云うが分れて有るから、子供の髪置き、はかま着、帯解杯ほろの祝いも、其の氏神云々。

縁日に仕しそうな者だが、江戸は云うに及ばず、日本国中、皆押しなべて霜月十五日、日目上人の御命日に子供の祝いするというは、是れ一つの不思議であろう。

日目上人正慶二年霜月十五日、御入滅遊ばすといへども、広宣流布の時至り、禁帝より御教書下り、嫡子

分の日目上人、一閻浮提の座主と成らせ玉ひし迄は、現有滅不滅の尊体にして、御尊形に寸分違はぬ御影を造立し、本山学頭寮に在すが如く安置し奉る。是れ各々方々嫡子を祝いの表示、天然不思議の道理、江戸に限らず、日本国中此の如く

なる事、是れ不思議とや云はん。奇妙とや云はん。中々以て門流私の掬こしえ事に非ず。天地自然の道理と云う者でござる。右の如く、只だ御三師の紋所の事にすら、右の如く深意ある当門流だ。右云う処の義、門流に限るに非ず、法華宗に限



七五三詣りの古風景

るに非ず。他宗でも神道者でも、儒者でも何でも、凡そ人間と生れたる者には皆一流にこうむる処の御紋の謂れで御座る。御紋の事ですら此の如くだ。増して況や法門の事に於ては云うに云い尽されぬ大無辺な事で御座る。強ちに道心堅固に

して志あらん人は委しく尋ね聞いて信心倍增あられう事が肝心で御座る。

門流私の掬えごとで無い証拠、目出度いと云う目の字を付けて日目と名乗る事、御歳十五歳の時、大聖人より下し置かれたる名也。此の時何ぞ嫡子分の思い寄せ有るべけんや。御紋も自然と松と竹。

扱て又霜月十五日、世間で子供の祝いをするから、どうぞ其の日に死んで、名を残そうと思いたればとて、死なれる病でもなく、又たとひ其の日に死ぬる者、今迄幾いく等も有ったであろうが、目師の如く御紋と云い、御名と云い、三つ揃って名を残したる者はない。

尚又日目上人御遷化の砌は、死んではならぬ時の御入滅だ。其の故は御存生七十三の御老体に至る迄、何卒して此の大法を禁帝をして御信入有らしめんと申し召して奏問の功、都合四十二ヶ度、第四十三度目に、又々止む事を得ず、大石寺おば日道上人に御譲り遊ばされ、日尊日

郷の両師を御供にて、又候上京遊ばされ、途中美濃国樽井の宿に於いて卒に御入滅遊ばされぬ。

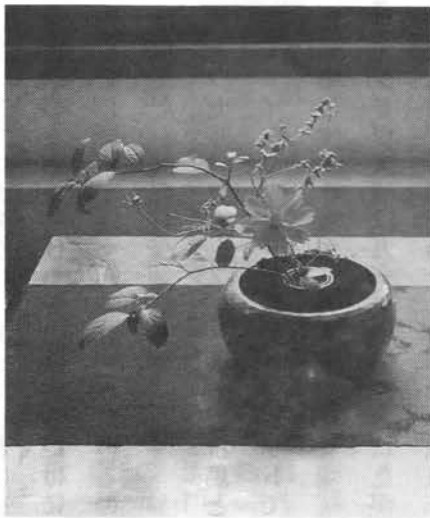
爾れば、夫れ浄土宗の善導和尚が如く、態々死のうとして柳の木に上り、逆様に落ちて死んだのではない。霜月十五日に態々死のうと思し召して御遷化有ったのではない。奏問上京の途中、死んでならぬ時に御入滅遊ばされた。爾れば夫れ彼此以て全く門流私の拵え事でない証拠斯くの如しだ。

* * *

さてはや御三師の御紋の事を申入れ様と、先月中から風聴致し、漸く今度申入れた処がろくな事も聞けず、何かはや前置き計り大そうで蛇が出そうで蚊も出ないと思う衆があるかも知らぬが、是れとても右云う通り、只だ一通りうっかりと耳に聞いた計りでは何か可笑しく小事附等敷く、後日に拵えた事の様に聞こゆれども、能くとつくりと端に心に聞き入

れ思慮分別をして見れば、無始法爾天地爾然の理と云う処、いやと云われぬ有難き事でござる。強ちに必ずうかつに聞かぬ様に、能く諦かに心に聴き取る様に聴聞が肝要でござる。

以上、日宣上人の御会式の御説法より、ご三祖の御紋についての部分を抜粋してご紹介でしたが、江戸時代においても、「子供の髪置き、はかま着、帯解杯の祝い」等とあるように、日本国中で七五三がうかがえます。



【神無月詠草】

〔橋本 圓子〕

さずかりものの独り子 遣かせし人の言
「預かりものを神に返せり」と
「コンバンワ」受話器を取れば聞き馴れし
亡夫さながらの 四男の声

〔故橋本 義一〕

外房の 水平線より 出づる陽に
宇宙の真理を 説かれし聖人
式次第 太き筆もて 書きあぐる
拙き運びも 喜悦をこめて

【恵日俳壇】

〔宮下 留代〕

御堂筋 木の実バラバラ 人の群
森深く 椎の実拾いの 子等と逢ふ



ちよつと寄り道 ④

エクセル礼讃

伯耆の里 もりたかんどろ

パソコンの普及とともに、ユーザーの指向はワープロソフトから表計算ソフトへと確実にシフトしている。その中でも、マイクロソフトから出ているエクセルは、拔群の人気。ここ数年のエクセル熱、そのモテモテぶりには目を見はる。この小さなパソコン教室でも、受講希望の8割はエクセルである。残りの2割を一太郎とワードとで分け合っている。

じつさい、エクセルはとてすばらしいソフトである。使っているため息がでる。講習していて誇りに思える。ソフトというより芸術という呼び名の方がふさわしい気がする。この使いよさ、柔軟性、洗練された機能、これらを知っていると

いないとでは大ちがい。知っていれば楽々と余裕をもって仕事をこなせるだけに、知らずじまいで日々あくせくしているのはなんだか気の毒な気がする。

エクセルはロータス123の対抗馬としてマイクロソフトが開発したソフトで、はじめにマック版が一九八五年に登場、ウィンドウズ版は九一年に追加されたが、普及にはずみがついたのはやはり九五年のウィンドウズ95以降のエクセル95あたりからであろうか。その後の勢いはとどまるところを知らない。

すぐれた機能の多いエクセルの中でとくにお薦めしたい便利機能は、①表示形式、②条件つき書式、③ピボットテーブル機能である。

エクセルの表示形式はとても強力である。たとえば99年11月1日の曜日を求めるのに、かつての123では@chouse(@a

＊・命・H・E）という長い式をつくる必要があった。これでも当時は便利だった。しかしエクセルではわざわざ式をつくらなくても表示形式をaaaと指定するだけでその日付の曜日がわかる。

条件つき書式もおもしろい。データベースソフト桐の機能にも同じものがあるが、男は水色、女はピンク色といった色分けなどがデータごとにできる。

そしてピボットテーブル機能は、エクセル最高の機能である。これを知って感心しない人はいない。ピボットというのは回転軸という意味で、データをいろいろ回転させて集計・分析できるところから名づけられている。123時代にデータベース統計関数と演算表機能を組み合わせようやうできたクロス集計も、マウス操作だけであつたという間にできる。まるで手品のようである。もはや、これを知らずしてパソコンを語れない。

日蓮正宗の血脈相承について

——『純正日蓮主義』より抜粋——

荒木清勇

はじめに

連載中の荒木清勇居士は本宗最初の法華講総講頭であり、宗門外護の篤信者でした。また居士は法門に造詣が深く、多くの著作を残されており、今回はその中から居士の血脈観について紹介します。

近時宗門は創価学会の教学に汚染され、法主信仰が行き着くところまでいってしまつた感があります。しかし明治・大正頃の宗門や法華講に、現在のように極端な法主絶対の思想があつたかどうか、この小論文をみれば明らかでしょう。

当代の貫首や会長に無条件に信伏従するような邪義迷信は、近年学会と宗門が教団組織を統制するために、意図的に作られたものであることがわかります。

この論文が載せられた『東宮殿下御魁の紀念（純正日蓮主義）』は大正十年に発刊され、天皇・皇后および皇太子にも献上されたものですが、宗門本来の血脈観を知るうえで、時代を越えて、多く示唆するものがあります。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

【本文】
ある人云く、

「日蓮正宗においては、金口嫡々血脈相承があると云うて、その時々々の貫主を生きておわす宗祖大聖人と崇拜するは、あたかも本願寺の生き如来を崇拜するごとき迷信である。而してその歴代中には随分低能者もあれば、学識のない人もありしことは、その著に徴して明らかであると。」

これは甚だしき誣妄にして、迷惑の至りである。吾が正宗においては、聖祖より日興上人へ金口嫡々血脈相承がありて以来今日に至るまで、現に継承せられつつあるから、その相承があるというので、決して虚喝を云うのではない。然れどもこれあるが故に時々々の貫主上人を生きて在す大聖人として崇拜するがごときことは、法義上決してあらざることである。

けだし、僧侶崇拜時代に各宗の尊大主義にかぶれて「法水写瓶一器の水を一器に移すがごとき」と云いし語に附会して、あるいはそんな迷信説を云いしかも知れざれども、そんな迷信説は何にせよ堅く誠め置くべきことである。

しかし、金口嫡々、法水写瓶、血脈付法相承とは、世間普通の語に代えてこれ

を云えば、遺言で極りた嫡子跡取り相続人と云うことである。それを言便上金言を金口といい、嫡子を嫡々と云いしものである。

例せば、聖祖が「呵嘖謗法抄」に上行の別付を指して「嫡子として譲らせ給へる」と宣のたまい、興師が目師への譲状に「為三嫡子分二可レ令三管領一（嫡子分として管領せしむべし）」と示し給うたことである。然れども、肉体上の嫡子でなく法脈の相続人であるから、法水写瓶、血脈附法相承といたるもので、いわゆる仏門の莊嚴言である。金口嫡々と云うからとて口から口へ直に伝えるという訳のものでもない。

凡そ血脈相承といえは法門の血脈（種



『東宮殿下御魁の記念』

「一、時の貫主為りと雖も、仏法に相違して己義を構えば之を用ゆべからざる事」と、これに依りて観る時は、貫主上人とて仏法に相違することを云はれざるには限らざること明らかである。さすれば総本山歴代中に学徳高からざりし方がないと断言できざれば、ただ先師の御説と云うて平信じに信ずるのは、また

脱二種）、生死の血脈、信心の血脈、法体の血脈等ありて、その法体血脈がすなわち師資相承にして、聖祖より興師への血脈相承がすなわちそれである。而してその法体とは独一本門三大秘法三個総在の本門の御本尊にして、この御本尊を事の広布の時まで擁護し奉る責任を命じられたのが、すなわち血脈相承である。しかしこの血脈を受けられし貫主上人とて、みな性が鋭敏にして学識もあり信心も強盛なに限りたものではない。例せば貴顕名家の嫡子にても低能者もあり、愚鈍な人もあると同じことで、みな過去世の因縁に依るのである。故に日興上人の二十六ヶ条の第十七条に云く、

多少の危険なきにあらずである。故に法義のことはどこまでも依法不依人の聖誠を確守することが肝要である。かく申したならば仏法に相違すればその貫主は謗法者にして墮獄すべしとねじ込む論者がありましようが、凡そ謗法には軽重ありて、成仏の所詮にあらざることは、所謂「随方毘尼ずいはうひに」に摂して深く咎とがむにも及ばざるべきか。何となれば、成仏の所詮は初信の境妙即本尊にあれば、初信の御本尊さえ時機相応の正境であれば、設い法義は知らないでも、また法門が少々間違ちがうていようとも、成仏のできるのが、即聖祖の大慈大悲である。いかに誠心誠意をもって強盛に信心しても、所信の御本尊が時機不相応の境妙であれば、成仏はできるものではない。故に「総在一念抄」に曰く、

「若し正境に非ずんば縦たひ妄偽もうご無けれども亦種と成らず」

※ ※ ※
また或るは云ん、

「正宗においては総本山大石寺の第二十六代の貫主日寛師を大学者として崇敬することさながら仏のごとくである

が、寛師の著書を見ればその枢要なる法義は三位日順の詮要抄に学ばれたるものにして、興師に学ばれたるものは還つて平凡な法義に過ぎざること明らかである。何ぞ順門下と云はざるや」と。

この義一理あるに似たれども、興尊よりの相承は、当時公にせられたる書籍なければ引用上便ならず。順師の詮要抄は写本ながら公に顕れたる書籍である。而してその云うところ敢えて興尊の意に違わざるをもって、便宜上引用し給いたるものである。

例せば上行菩薩の別付嘱は法華經の神力品なれども、聖祖は「当体義抄」に大強精進經の文を引用して妙法の深義を説明し給うがごとくである。もし詮要抄の文を引用し給ひし故順門下とせよと云わば、聖祖の別付嘱は法華經神力品と云うを止めて、大強精進經にせよといつか。

※ ※ ※
また或るは云ん、

「興門流の秘書は今回日蓮宗宗学全書に掲出しあるによりこれを見れば、一目にして聖筆にあらずして後人の加筆せしこと明白なるものもあり。また会

通し難きものもあるに、正宗の日寛師は多くこれを著書に引用す。寛師が引用せし秘書は悉く聖祖の真跡と認められたるものなりや」と。

御秘書中に後人の加筆せしこと明白なる点もあり、また誤写もあるのをそのまま提出せられしは、その提出者の杜撰にして、何人にせよその責は提出者にあることもちろんならん乎。而して寛師が引用し給ひし秘書は、その全部を御真跡と誤認せられしや否やはここに明言する能わず。あるいは時の学弊に依られし点もなきにしもあらずといへども、引用し給いたる部分が内秘の御相伝に合致するが故にこれを引用し給いたるものならんと拝信す。何となれば聖祖が寺泊御書に、同本異訳の正添両法華經の文を引用し給いたる例もあればなり。余は後の君子の公評に待つのみ。

※ ※ ※
尚お、終りにのぞみて一言す。

それ世界の大勢は何時しか本有無作時代に還りつつありしぞ。觀よ東天には早旭日の光明輝けり。起きよ蓮祖門下の素

繼、目を醒されよ。国民諸君、いつまで煩惱の夢を貪りつつあるか。大言壮語して憂国慨世を絶叫せし人は少なからざりしが、実践躬行して国家の為に尽くせし人は幾人かある。実に遺憾の至りならずや。村祭りの獅子口を開けば小児はこれを恐るるも大人誰かこれを怖るべきや。動物園の眠れる獅子口を閉るも誰かこれに手を触るものあるべきや。もし只口ばかりにして精神のそわざるものは、あたかも祭の師子である。蓮祖門下にこの師子たるものはあらざりしや。

聖祖曰く、

「蒼蠅驢尾に附して万里を渡り、碧蘿松頭に懸かりて千尋を延ぶ。」

と。豈力微なりといえども、不自惜身命の奉公を励まざらんや。願わくは門下の素繼疾に世の大勢に鑑みて聖祖御在世の御困苦を偲び奉り、今後僧侶は妄りに權威を弄せず、信徒は徒らに形式的に流れず。俱に人倫普通の礼度を守り、苟も身に詐親なく真に異体同心の觀念に住して、聖祖所立の本有無作主義を拡張せられんことを、茲に希望しておくのであります。

興風談所出版書籍のご案内

◎『日興上人全集』(七〇〇〇円)

本書は、日興上人生誕七百五十年を記念して、上人の述作・消息・記録等を『日興上人全集』として収録、刊行したもの。
A5判・上製本・全六一四頁(御筆写真二一八頁)

◎『日興上人御本尊集』(二二〇〇〇円)

本書は、第一部「御本尊目録」、第二部「御本尊写真・図版・注記」、第三部「御本尊解説」の三部からなる。
B5判・上製本・全三九六頁

◎『興風叢書』(各二二〇〇円、〔1〕は在庫切れです)

興風叢書〔2〕

内容：保田妙本寺十一世日要師御談 法華本門開目抄聞書／不受不施派開祖日興師真筆 一生御立願十三箇条

興風叢書〔3〕

内容：保田妙本寺十一世日要師御談 一代大意抄見聞・四信五品抄草案私・法華本門本尊問答抄／身延久遠寺十一世日朝師御談 当家朝口伝(上・下)

興風叢書〔4〕

内容：大石寺第三十一世日因上人 宗旨建立三四月会合抄

興風叢書〔5〕

内容：宮崎県題目石塔調査レポート

◎『興風』(二号く五号は、在庫切れです)

興風六号(一三〇〇円)

論文内容：広蔵日辰の教学(上)／事行の法門について(一)／「法華教主抄」解説／仏教資料研究・法華教主抄(三)

興風七号(一三〇〇円)

論文内容：事行の法門について(二)／『日興上人御遺告』を拝す(一)／仏教資料研究 楢生枕雙紙(一)

興風八号(一三〇〇円)

論文内容：事行の法門について(三)／日蓮大聖人の思想(一)／仏教資料研究 楢生枕雙紙(二)

興風九号(一三〇〇円)
論文内容：事行の法門について(四)／日蓮大聖人の思想(二)／仏教資料研究 楢生枕雙紙(三)

興風十号(一三〇〇円)

論文内容：事行の法門について(五)／日蓮大聖人の思想(三)／仏教資料研究 楢生枕雙紙(四)

興風十一号 日興上人研究特集号(一三五〇〇円)

論文内容：日興上人御本尊脇書について／重須本門寺と大石寺／無年号文書・波木井日円状の系年について／北山本門寺蔵・日興上人筆「日興賜書写本掛物」について／『日興上人全集』正篇編纂補遺／日興上人本尊の拝考と『日興上人御本尊集』補足／日興上人全集・日興上人御本尊集 正誤表

興風十二号(一三〇〇円)

論文内容：「立正安国論」の世界とその取り扱いについて／『五人所破抄見聞』の考察／方便品読論争の淵源と展開(上)／仏教資料研究 楢生枕雙紙(五)

◎『興風紀要』(各一三〇〇円、第二号は在庫切れです)

興風紀要 創刊号

論文内容：事の法門について／山内有志の御用教学に答う／水島・尾林論文の雅説を破す／法体の広宣流布・化儀の広宣流布

興風紀要 第3号

論文内容：仏法か外道か／当局教学の破折と富士の立義に関する一考察／山田論文を一読して／折伏について考える／御利益信仰の呪縛／滅後末法の「衆生の得道」について／正信覚醒運動の本質・正信覚醒運動の本質・統

◎『日興門流上代事典』(大黒喜道編著・十一月刊行予定)

※各書籍のお問い合わせ、申し込みは、直接左記興風談所までお願いいたします。

〒701-1133

岡山市富吉二一六八

興風談所

☎(〇八六)二九四一五四二六

最近の阿部日顕師の御指南

懺悔か弁解か、はたまた耄碌か、「法主上人」の講評

「河辺メモ」なるものによって、阿部日

顕師が昭和五十三年頃、戒壇本尊偽作説をと
となえ、かつ日達上人に対し批判的だった
ことが暴露され、大きな話題をよんでいる
が、今度は「富士学報」に、阿部師の懺悔
とも弁解ともつかない指導（講評）が掲載
されて注目をあびている。

この発言を読むと、いままで強気一本で
きたはずの阿部師が、もはや自分の言葉の
もたらず影響すら理解できないほど混乱し
てきた姿が彷彿としてくる。

歳月の流れとともに、強権をふるって教
団を私物化してきた阿部師や池田氏の、虚
飾に満ちた仮面が剥がされるのもそう遠く
ないようである。

ここでは、お粗末としか言いようがない
発言を左記に紹介するとともに、その虚実
を検証する。

阿部師の講評

（前略……平成十年の教師講習会におい
て「創価学会の三宝義を破折せよ」という課

題論文の講評をのべる……）

創価学会も確かに最初は「三宝を守る」と
いうあの三箇条の中の一つを誓ったわけで
すから、本宗伝統の三宝について信伏随従し
ていくという事は、一応基本的にはその考え
が一時はあつたはずなんです。けれどもや
はりそこがまあ在家の独特の慢心の根本の
一念が存在して、次第次第に色々な面で宗
門の伝統のあり方を軽んじてくるという姿
が出てくる訳なんですな。

それが昭和五十一年路線と言われる頃、
宗門の僧侶の人達もそれに気付いて、色々と
破折をされたという事がありました。私は
あの頃教学部長をしておつて、迂闊だったけ
れどもあまり創価学会のことに関する邪義
を破折する事を、初めのうちは行わなかつた
意味がありました。却つて色々な末寺の住職
等の人達の中でそれを真剣にやつてきた人
が多かつたのです。

私がそういう事をしなかつた理由はいま
でも述べたかも知りませんが、しなかつた
のではなく、ある一つの思い込みがあつたの

です。この思い込みというのは、色々な人の
色々な立場の色々なところにあるわけです。
皆さん一人一人の中にもそれぞれ何らかの
思い込みもあるはずなんです。その思い込みの少
し違つた筋道の思い込みがなかなか自分で
は分からないし、そこから抜け出られない意
味がありますね。そういうところに謗法に
よる罪障の姿が色々な形で現れてくるわけ
です。【注①】

私の場合は、前から言うように、一口で言
えば、一番昔に創価学会が何となくおかし
い。何となく創価学会が好きになれない。そ
ういう事をおそらく一番最初に感じたのは、
あの頃の宗門の中で、かく言う私ではなかつ
たかと実は思っています。他の方々はまだ創
価学会について「何か一生懸命やっているら
しい」といった認識だったように思いますが、
その姿を見て何となく創価学会の在り方の
中におかしいものがあるような感じを私は
最初に持ったんです。そういうところから私
が一時精神的な意味で、更に具体的には実

際問題としてもかなり対立したことがありました。戸田さんとも喧嘩した事があったりその他色々な意味ですね。【注②】

それである時期からやはり当時の宗門の状況から、創価学会は仏敎の団体であり、広宣流布の団体であるという事が、どうにもどうにも全体がそういう空気になるましたから、私としては、自分を折伏したんですね。「あの仏敎の団体の創価学会に対して少しでも気分が合わないという事はおかしい。自分自身が謗法・罪障・煩惱があるためだ」というふうに思って、自分自身を徹底的に折伏して、しきったところで教学部長になつたわけなんです。【注③】

そういう経緯でしたから今度は逆になつてしまつたわけです。当時の宗門の若い僧侶の人達が創価学会の間違いをどんどん感じて言ひ出した頃、私は逆に、何か創価学会擁護、というよりも一番心の根本のところ、創価学会がやはり仏敎の団体であり、広宣流布の団体で、何としても揺るがない正義がそこに存在しているんだという事を思いこんできてしまつて

いましたから、そこへ入んがどうにも私自身が先にたつて批判する形が取れない。気持ちがあるところに思い込みがありますと、なかなか一つのものを讀んでも素直にそういう



阿部師の発言が物議を醸している

うふうには取れなかつたんですね。その点は

当時の若い人達、今は相当の年齢になつていけるけれども、そういう人達が色々な面から創価学会・池田大作などの間違いを正して

きた、あの形が全く正しかったと思います。

【注④】

但し色々問題がはつきりしてきてから、私も教学部長の立場において、創価学会の色々な誤りをはつきりしようとして、この中にもいらつしゃいますが、三人五人それより少し多かつたかもしれませんが、当時の人達に大講堂に集まつてもらつて、創価学会のあらゆる論文等の中から色々間違つている面を全部抜き出して、そしてそれについて創価学会に指摘をしていくという事の内容の一番基となるものについて、教学部長としてやったのであります。何もしなかつたではありません。ある程度後の方ではそういう事もきちんとやつて、教学部長としての職務を遂行させて頂いた事はありますが、しかし最初の頃はむしろ他の若い人達の方が、日達上人の御教導の下に宗門伝統の信仰・教義の上から、学会の言っている事がおかしいという事をどんどん指摘してくれたのであります。そういう経過がありました。【注⑤】

(中略)……それでも学会には基本的に三宝輕視の考えがあつた(取意)……)

そういうところからだんだんと事実も経

過してきまして、日達上人が最終的には創
 価学会の反省・懺悔を認められて昭和五十
 四年五月の総会に於いて、それを諒とされ、
 今後は僧俗一つになり創価学会の折伏を大
 いにこれからも發揮して広宣流布に向つて
 進むというところに一応収まつたわけだし
 た。……以下省略。【注⑥】

〈平成十一年度発行・富士学報より〉

講評の講評

【注①】 阿部日顕師は教学部長時代、創
 価学会の逸脱が明確になって、正信覚醒運
 動が起こった時、うかつにも自分は学会の
 提灯持ちをしてしまったが、そのことは自
 分がある思い込みをもっていたため、それ
 がわからなかった。これも謗法による罪障
 の姿が現れたものと自覚しているという意
 味なのだろうか。ずいぶん思い切った発言
 である。

【注②】 ここで阿部師は「自分が宗門で
 一番早く学会はおかしいと感じた」などと
 事実とは違うことをいって、その後の学会
 べったりの行動を弁解をする伏線としてい
 る。昭和三〇年頃までの宗門人のほとんど
 が学会に批判的だったことは狸祭り事件の
 頃の資料に明確である。阿部師は当初法主

の息子という特権意識から、在家何するも
 のという反学会的な気分をもってしたこと
 はたしかだが、いち早く時代の流れを察し
 て保身と出世のために学会にへつらい、迎
 合していったのである。戸田氏との件も、
 法主就任直後は学会向けに、さも牧口・戸
 田氏とも仲が良かったようにいつていたが、
 ここでは宗内向けに戸田氏の頃から反学会
 であったかのごとく装っている。この頃は
 本音と建前の二面性をもって学会に接して
 いたということだろうか。

【注③】 これはかなり正直な気持ちかも
 しれない。自分が学会シンパとして宗門を
 売りわたし、学会からも特別扱いをうけ、
 ひとり多額の御供養を受けることは、自身
 の行動を合理化する以外には良心の呵責に
 たえられまい。それには最近の離脱僧のよ
 うに、学会こそ仏勅の団体、宗門は墮落し
 た集団という論理に盲目的に染まってしま
 うことが、自己欺瞞を正当化する唯一の道
 である。

それにしても、「学会に批判的な」自分
 自身を徹底的に折伏して、しきったところ
 で教学部長になったわけなんです」などと、
 恥ずかしげもなく、よくぞいったものでは
 ある。このような教学部長を頂いた宗門の不

幸はいうまでもない。

【注④】 ここで正信覚醒運動が正しかつ
 た事を認めているのは良い。しかし、それ
 ならなぜ素直に自分が間違っていたことを
 認め、それを訂正しないのだろうか。法主
 就任後も、自分がこの運動を弾圧してきた
 ことは忘れてしまったのだろうか

【注⑤】 しかも、自分も何もなかった
 わけではない、少しは教義の誤りを正す努
 力をしたかのように言い訳をするが、果た
 して事實は、創価学会に内通して、宗内情
 勢を逐一学会に報告していたのである。
 「教学部長としての職務を遂行させて頂い
 た」とはどういうことか、自分を折伏し、
 創価教の教学部長としての思い込みで職務
 を遂行したということなら、この文意は通
 ずるのであるが。

【注⑥】 日達上人や当時の活動家（現正
 信会）がせっかく学会の体質改善の道を開
 き、池田大作を引責辞任させたものを、そ
 の後、すべてを反古にし、正信会の僧俗の
 首と引き替えに学会から多額の寄進を受け
 てきた経過には一切ふれていないのはなぜ
 だろうか。

日達上人からの相承も自分勝手な「思い
 込み」ではなかったのか。

一九四九年生まれの松川氏が病によって亡くなったのは昨年のこと。国語科教師として愛知県の高校に長い間勤務していた氏は、その間「高校生のための文章読本」をはじめ、多くの書を手がけてきた。

また、日本山岳会会員として山を愛する登山家でもあり、市民オーケストラではチェロ奏者として音楽を楽しみ、詩は若いときから書き続けるなどロマンチストでもあった。その幅広い生き方からは、心から尊敬してやまない宮沢賢治の雰囲気さえ漂ってきそうだ。

雑誌『岳人』に「山の放課後」を連載していたこともあって、療養中の励みに作品集を作ろうという話を持ち上がった。しかしそれも早すぎる死に間に合わなかった。氏を慕う仲間からは誰となく「遺稿集」という声が。

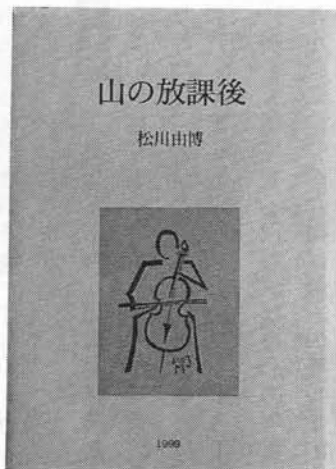
第一章は『岳人』に連載したエッセイが中心。第二章が職場の仲間で作った山行記。第三章が一般と高校生向けに書いた山への案内書。ここまではむしろ作品集の趣だが、第四章には家族に宛てた私信が収録されていて、遺稿集としての要素も兼ね備わった。

どの頁を開いてみても、幅広い教養と深い思索、それに山をまるごと愛する豊かな自然観が土台となった人柄がにじみでた、じつに味わい深いエッセイに出逢うことができる。

なかでも次の一文は、氏の生き方がそのま

読書案内

松田銘道



松川由博著

『山の放課後』

自費出版
定価 二〇〇〇円

ま語られていて、読む人のこころをグサリと突き刺す。

『地球に優しく』とか『自然保護』とかいう耳当たりのいいことが流行しているが、わたしはそれを聞いたたり見たりするたびに違和感を抱く。優しくされてるのは人間だ。保護されているのも人間だ。その意味では梅雨空に鼻の頭を濡らして我が世の春を謳う蛙と、わたしたち人間とは同じ生き物の列に並ぶ。人間だけに許された特権などありはしない。どんないきものも、ほんのつかのま、この青い天体の片隅にいのちを営まさせてもらっただけだ。」

また、「高校生のための山岳書案内」からは、山そのものの魅力を綴った多くの書に出逢うことができる。その中の一つでも手にするならば、誰もがただちに山の愛好家となれるはずだ。

氏が、山や音楽、そして詩を愛し続けたその気持ちのままに家族を大切にしたり人だと知れるのが、三人の子ども達に宛てたメッセージ。お父さんがいなくても、メッセージそのものがお父さん。悲しみなんか乗り越えて強く生きていくんだよ、との声が聞こえてきそうな親の深い愛情に、つい感動の涙がでてしまう。

〔注文は松川宅（〇五八七―三七―二〇七四）迄〕

恵日だより

幹事会 ニューズ

▼来年の第三十回法華講記念総会と、平成十四年の立宗七百五十年の慶讃法要を、お寺や法華講で主宰する、寺院行事の一つと考えたり、受け身にならず、全員が自分にとって出来る報恩行とは何か、を考えて計画・実行して欲しい。

▼御会式にご供物を配るが、これは参加賞や景品ではない。法要に際して、御本尊にお供えした品を、お下げて分配する「お流れ頂戴」の儀である。古くは洗米などを一握りずつ配り、家庭のご飯に混ぜて炊いたりもした。物が豊富で有りあまる現代、本来の意義が一層薄れがちなので、再確認をして法要に臨みたい。

▼大きな法要のおりには、本堂正面の玄関が混雑し、下駄箱に入りきらぬ靴が、散乱しているので、法華講員には新設さ

れた脇玄関と、臨時下駄箱の利用を普及して欲しい。

▼南近畿法華講の主宰する一日研修会には、幹事・地区役員等の諸氏は、率先して参加、啓蒙されたい。



ご案内・お知らせ

*御会式日時の確認

例年、十一月の第二週日曜日（お講日）に、御会式を奉修しておりますが、今年に限り、第一週七日の日曜日が、御正会になります。時間は例年通り、午後二時から始まりますので、檀信徒の皆様には、くれぐれもお間違えなきよう、再度ご案内いたします。

*七五三祝詣り

十一月十四日（日）午後一時より、七五三祝詣りの法要を行います。参詣を予定される方は、お子さんの氏名と人数を、ご連絡願います。なお、十四日以外の参詣を希望される方は、前もって電話でお知らせ下さるよう、お願い申し上げます。

*婦人部役員会の日時変更

十一月一日（月）の婦人部役員会は、この月に限り、十月三十一日（日）の大掃除・お花作りの終了後に、引き続き行います。

*ツールペインティング展覧会

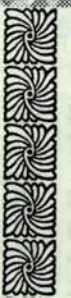
宝塚地区の河本美穂さんが、神戸市JR三宮駅近くの画廊「ひこばえ」にて、「河本美穂とその仲間たち」と題して、絵の作品展を開きます。家具や道具など、あらゆるものに、楽しい世界を描きあげた作品が、数多く展示されます。

日時：十一月九日（火）～十四日（日）
場所：画廊「ひこばえ」

TEL (〇七八) 三九一四一三七



十一月の行事



- 一日(月) 午後二時 お経日
- 六日(土) 午後七時 宗祖御大会式御逮夜
- 七日(日) 午後二時 宗祖御大会式御正当会
- 八日(月) 午後二時 広基寺お講
- 十三日(土) 午後一時 お講
- 十四日(日) 午後一時 七五三祝詣り
- 十五日(月) 午後七時 目師会
- 二十一日(日) 午後二時 法華経講義
- 二十八日(日) 午前十時 南近畿教区一日研修会

※十一月一日の継命新聞発送は『箕面・高槻』が担当です。
 ※十二月一日の継命新聞発送は『蛸池・服部』が担当です。

今月の宅お講

三十日(火) 午後一時半 槻木地区(虫辺清子宅)

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします
 締め切りは、毎月二十日です。

『恵日』の購読を希望される方は、左の口座に郵便振替にて
 購読料(年間二〇〇〇円〔含送料〕)を払い込み下さい。

加入者名 源立寺法華講
 口座番号 0093015114366

恵日
 編集兼
 発行人
 発行

菅野憲道
 恵日編集室
 〒563-0057 池田市槻木町一〇 源立寺内
 平成十一年十一月号 通巻五十七号
 平成十一年十一月一日発行

TEL (0727) 511335
 E-Mail: gen@wombat.or.jp
 購読料 年間二〇〇〇円〔含送料〕
 〒振替 加入者名 源立寺法華講
 口座番号 0093015114366